

アレクサンドル・デュマ『モンテ＝クリスト伯』における再生 —ヴィルフォール夫人による連続毒殺をめぐるエピソードから—

宮 川 朗 子

はじめに

アレクサンドル・デュマの作品は、共作という創作スタイルや決定稿を確定しづらい¹という問題や、紋切り型や反復表現などがあふれるその文体のために、文学研究の場において論じることが長らく忌避されてきた。とりわけ後者は、デュマの作品を評価することを妨げてきたのだが、最も厳しいと思われるデュマの文体に対する評価にも、読みなおしてみると全く否定しているというわけでないものもある。デュマを評価しなかった代表としては、しばしばフロベールが挙げられるが、ルイズ・コレに宛てた手紙の以下の一節は、その根拠として挙げられるものの一つだろう。

J'ai assez ri à la description de l'entrée de Béranger chez Dumas quand il a vu la dame en chemise. Quelle bonne balle que ce Dumas ! et quel chic de mœurs ! Sais-tu que cet homme-là, s'il manque de style dans ses écrits, en a furieusement dans sa personne ? Il fournirait lui-même un bien joli caractère. Mais quel dommage qu'une aussi belle organisation soit tombée si bas ! La mécanique ! la mécanique ! faire au meilleur marché possible le plus possible pour le plus grand nombre possible de consommateurs. On ne le lisait pas tant quand il faisait *Angèle*. Tout le monde le lit maintenant, par la raison qu'on boit plus habituellement du médoc ordinaire que du Laffitte. On a beau dire, il y a, jusque dans les arts, des popularités honteuses ; la sienne est du nombre².

¹すでに周知の事実ではあるが、拙稿で取り上げる『モンテ＝クリスト伯』もまた、主にオーギュスト・マケとの共作である。拙稿では、便宜上作者をデュマと呼んでおく。また、この小説の完全版である連載版は、これを掲載した新聞『ジュルナル・デ・デバ』*Journal des débats* を次のサイト <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k446668c.item> で読むことが物理的には可能であるが、この連載をまとめて出版した分冊版は現在閲覧が非常に困難な巻がある。本稿では、完全版に近く、確認されている草稿やデュマが参照した資料の反映もなされ、詳細な註が施された Alexandre Dumas, *Le Comte de Monte-Cristo*, édition établie par Claude Schopp, Robert Laffont : Bouquins, 1993 を用い、この版からの引用はページ番号のみ記す。また鍵括弧内は引用者による。

² Gustave Flaubert, *Correspondance*, J. Bruneau (éd.), Gallimard : Bibliothèque de la Pléiade, tome I, 1973, p. 343-344.

機械的で大多数に受け入れられることだけを目指しているようなデュマの文体を惜しんではいるものの、デュマという人物もこの作家が書いたものもおもしろがると同時に、その作品の「みごとな構成 *belle organisation*」を認めているふしもある。

フロベール同様、近年ではウンベルト・エコが、デュマの小説、とりわけ『モンテ＝クリスト伯』を「[...] その語りの構造にはほれほれするが、その文体が私の神経を逆なでする小説 [...] *un roman dont j'admiraits la structure narrative et dont le style m'horripilait*³」と吐露しながらもこの小説を評価し、以後、この小説を論じる際には必ずといってよいほど言及される『モンテ＝クリスト伯』論を著した。そして、この小説をイタリア語に翻訳した経験から、「[...] 大げさな表現や陳腐な言い回し、冗長さというものは語りの仕組みには関わっていないのではないか [...] *je me suis demandé si les formes ampoulées, la platitude et les redondances ne faisaient pas partie de la machine narrative*⁴。」と考えるようになり、以下のように結論した。

Il s'agit d'une question de style, mais le style narratif n'a rien à voir avec le style poétique ou épistolaire. *Le Grand Meaulnes* d'Alain-Fournier est sans doute mille fois mieux écrit que le *Comte de Monte-Cristo*, mais il alimente l'imagination et la sensibilité d'un petit nombre, il n'est pas immense comme *Monte-Cristo*, pas aussi homérique, il n'est pas destiné à nourrir avec une égale vigueur et une aussi longue durée l'imaginaire collectif. C'est *seulement* une œuvre d'art. *Monte-Cristo* au contraire nous dit que, si raconter est un art, les règles de cet art sont différentes de celles des autres genres littéraires. Et que peut-être on peut raconter, et faire de la grande narrativité, sans pour autant créer ce que la sensibilité moderne appelle une œuvre d'art⁵.

文体が問題だとはしていながらも、それは語りの文体で、その技芸は、おおよそ現代の感性が愛でるものとは異なるが、それでも尚、長年にわたって多くの人々の想像力を育んできたものだったとしている。凡庸な文体にもかかわらず想像力を掻き立てる物語と小説の壮大さや作品の長命さと

³ Umberto Eco, « Éloge de *Monte-Cristo* », *De superman au surhomme (Il Superuomo di massa)*, 1978), Myriem Bouzahr (trad.), Livre de poche, 1995, p. 77.

⁴ *Ibid.*, p. 81

⁵ *Ibid.*, p. 87-88.

の関係性が示唆されてはいるが、具体的に例証しながらこれらの相互補完の関係あるいは相乗効果を例証するのは難しいだろう。とはいえ、少し角度を変え、この小説のテーマを表現するデュマの方法を観る時、エコが指摘した「他の文学ジャンルの技芸とは異なるこの技芸の規則」なるものの一端は窺えるように思われる。そこで拙稿では、『モンテ＝クリスト伯』においては副次的なエピソードであるが、この小説の大きなテーマの一つである再生にも関わるように思われるヴィルフォール夫人による連続毒殺のエピソードについて、その源泉となった資料の取り入れ方やこのエピソードと小説全体との関係を検証することで、三面記事的なエピソードを「広大無辺で immense」で「ホメロス的な homérique」次元にまで広げようとするデュマの手法の一つの側面に光を当ててを試みたい。

1. 「ダイヤモンドと復讐」と『モンテ＝クリスト伯』

『モンテ＝クリスト伯』の起源のひとつに、ジャック・プシェの『ルイ14世時代から今日までの道徳と警察の歴史の記録のためにパリ古文書館より抜粋された史的回想録』(1839) *Mémoires historiques tirés des archives de Paris, pour servir à l'histoire de la morale et de la police, depuis Louis XIV jusqu'à nos jours* 中にある「ダイヤモンドと復讐」*Le diamant et la vengeance* があることはよく知られている。このエピソードをデュマが隠すどころか公にしていたことは、この小説を連載した新聞社から1846年に出版された版に、「フランソワ・ピコ 現代の事件」*François Picaud, Histoire contemporaine* のタイトルで収録したことから明らかであるが⁶、ダニエル・コンペールは、この警察の記録保管者の回想録からの抜粋は、ジャーナリストのエミール・プシェリと作家のエチエンヌ・ド・ラモット＝ランゴンによってなされたことにも注意を促している⁷。

この事件は、美しく財産のある娘マルグリット・ヴィゴルーを射止めた靴職人フランソワ・ピコが、彼の幸福をねたんだ友人たちに陥れられて投獄されるが、出所後、自分を陥れた者たちに復讐するというものだ。これは『モンテ＝クリスト伯』の筋立てとほぼ一致するのだが、その対応関係は、ピコが出所後、自分を貶めた者たちとその訳を知るために、事情を知

⁶ *Ibid.*, p. 12, 101.

⁷ Daniel Compère, *Le Comte de Monte-Cristo d'Alexandre Dumas : Lecture des textes*, encrage, 1998, p. 11.

るアントワーヌ・アリユという男にダイヤモンドを差し出して聞き出したことや、その時イタリアの僧侶に成りすましていたこと、そのダイヤモンドの買い取りの値段をめぐる争いからアリユが宝石商を殺害する事件まで起こしてしまったという細部にさえ認められる。

しかしながら、上述のような筋の展開の類似ばかりではなく、重要な変更点もあり、それらこそがこの小説の規模を増幅させている。まず挙げられるのが年代の変更である。ピコの事件は1807年に起こったが、デュマは、このエピソードを1815年にすることで、ヴァンデの政治運動にイギリスを介入させる手立てをつけたというピコの嫌疑から、ナポレオンの百日天下にとまなう動乱とダンテスの行動との関係づけへと変更している。さらに、ピコが獄中にいた期間を7年から14年に引き延ばすことで、七月王政時代の社会風俗を描くことを可能にしている⁸。この年代の変更により、この小説に歴史的側面と七月王政期の政治・経済を担う者たちへの批判がより色濃く反映される。それは、逮捕以前のダンテスと大して変わらぬ身分だった、フェルナンやダングラールといったダンテスを陥れた人物たちが、ダンテスの脱獄後には、貴族院議員や大銀行家へと成りあがり、同じく彼を断罪したヴィルフォールも、司法の出世街道を着実に進んでいたことに顕著に表れている。

また、ピコは刑期を終えて出所したのだが、デュマは、ダンテスを死んだファリア神父と入れ替わらせ、海に投げさせるという劇的な展開に変更する。そしてこの場面は、その後、この小説の数多くの翻案映画やテレビドラマの見せ場となる脱獄シーンを創出することになる。

ところで、「ダイヤモンドと復讐」には、われわれが注目するヴィルフォール夫人による連続毒殺のエピソードの起源と思わせる一節もある。それは、ルビアンへのペットの連続死のエピソードであるが、まずはその部分を引用しておく。

Quelque temps après, un superbe chien de chasse, appartenant au maître du café [Loupian] fut empoisonné, et un jeune garçon déclara avoir vu un *client* jeter des biscuits à la pauvre bête. Ce jeune homme donna le signalement du *client*. On reconnut un ennemi de Loupian, qui pour se moquer, venait dans le café où Loupian était en

⁸ Cf. *Ibid.*, p. 47-49.

quelque sorte à ses ordres. Un procès fut intenté au malfaisant *client* ; mais il prouva son innocence en faisant constater un *alibi*. Il était courrier-suppléant des malles-postes, et, le jour du délit, il arrivait à Strasbourg. Deux semaines après, le perroquet favori de madame Loupian subit le sort du chien de chasse et fut empoisonné avec des amandes amères et du persil. On recommença les recherches ; elles furent sans résultat⁹.

「ダイヤモンドと復讐」のエピソードにおいて、ピコは、最後の復讐相手ルピアンを殺す際、この毒殺事件も含めた一連の不幸な事件は自分が起こしたものだとしている。それに対して『モンテ＝クリスト伯』では、ヴィルフォール夫人自らが手を下すが、毒に関する知識はモンテ＝クリストが夫人に直接授けており、自身の復讐のために、夫人の毒殺を利用していることが示唆される。また、「ダイヤモンドと復讐」で、事件の嫌疑が「客 *un client*」にかけられるくだりは、ヴィルフォール家の連続殺人がこの家の娘ヴァランティーヌによるものだと、当初医師のタヴリニーが観ていたことに対応するだろう。確かにこれだけをもって起源とすることは少々無理があるかもしれないが、「ダイヤモンドと復讐」のこの一節は、プシェの著作に収められたもう一つのエピソードと照合するとき、無視できない要素もある。次章では、そのエピソード「ある家庭の犯罪」*Un crime de famille*を検討する。

2. 「ある家庭の犯罪」とヴィルフォール夫人による連続毒殺事件

「ある家庭の犯罪」は、上述したプシェの『史的回想録』第2巻に収められている¹⁰。このエピソードは、1993年に出版されたブカン版の『モンテ＝クリスト伯』で初めて再録された（参照：1221-1230）ようだが、まずはこのエピソードの概要を、少し長くなるが紹介しておく。

パリ議会議員であるド・M...氏は、名家の一員で、美德と誠実さを誇っていた。清廉で、大法廷でも多大な影響力を与え、人々は彼の意見に忠実に従っていた。長男は司教となり、これに続く三人の息子は結婚した。三人の娘も

⁹ Jacques Peuchet, « Le Diamant et la vengeance, Anecdote contemporaine », *Mémoires historiques tirés des archives de Paris, pour servir à l'histoire de la morale et de la police, depuis Louis XIV jusqu'à nos jours*, tome V, A. Levassieur et Cie, 1838, p. 214.

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k64810p/f216.image> Voir « Documents » (1214).

¹⁰ *Ibid.*, tome II, p. 1-26.

嫁いだ。ド・M...氏は、裕福な未亡人となった姉と退官した兄の一人とともにマレ地区にある大邸宅で暮らしていた。ド・M...氏の妻は、何年も前に亡くなっていた。

ある朝、ド・M...氏は手紙を受け取ったが、そこには、氏のせいで破滅させられたので、これから復讐として、氏の家族を次々に死に追いやると書かれていた。

それから間もなく毒薬による事件が相次ぐ。まず、夕食前に食事の味見をした料理人の助手が犠牲となるが、彼はどうか一命をとりとめた。その後、次男夫婦とその二人の子、三男、四男、長男が次々に毒殺され、ド・M...氏の姉は、仕掛けられた爆発のせいで、就寝中に死亡し、その近くの部屋にいたド・M...氏は負傷した。

ところで、これらの事件の合間に、次男に気に入られていたサン＝ジャンという召使が、ド・M...氏に、ある恐ろしい体験を語りに来ていた。この男によると、三男のド・ヴァルテル氏が死ぬ二日前の晩に、彼の枕元に死んだ次男が現れ、残された自分の子を守るよう頼んだという。この話に動揺しながらも、ド・M...氏は、サン＝ジャンに屋敷を出ることを許さなかったが、その後の爆発事件やサン＝ジャンの再度の懇願によって考えを変え、彼の願いを聞き入れた。

次男の子を安全だと思える場所に預けた後、サン＝ジャンは屋敷に戻った。数週間がたったある朝、彼はド・M...氏のもとに、自分は毒を盛られたのでまもなく死ぬが、解毒剤で延命している間に話したいので警察と検事を呼ぶよう頼み、次の告白をした。

ド・M...氏の三男の妻ド・ヴァルテル夫人は、夫を憎んでおり、自分の財産を大幅に増やし、未亡人となりたかった。そして彼女がひそかに愛し、巨万の財産があるのならば結婚してもよいと言った、ある同輩公と結ばれることを望んでいた。この目的のために、彼女は自分の息子にこの家の財産すべてを集中させる計画をたてた。まず毒薬を研究し、次にサン＝ジャンが紹介したイノサン墓地の書記に金を渡し、ド・M...氏宛ての例の脅迫状を書かせた。彼ら二人にとって、何人も殺すのは簡単で、ド・ヴァルテル氏を毒入りのイチジクで殺したのも、ほかならぬ妻であった。しかしながら、罪を重ねるほどサン＝ジャンは落ち着かず、共犯者を告発した時には自分も死ぬのだということが分かっていた。ただ、彼には告発する証拠がないため、自分が仕えた主人の亡霊の話をでっちあげた。

ド・ヴァルテル夫人は、爆発事件を起こしてド・M...氏の姉を殺したが、殺された夫人の部屋係に嫌疑がかかるよう仕組んでいた。ド・ヴァルテル夫人は、ド・M...氏の次男の子の行方が分からないことに苛立ったが、サン＝ジャンと手を切り、次男の子も行方不明ということにした。サン＝ジャンは警戒し、家で食事をとらないようにしていた。

しかしこの日の朝、サン＝ジャンは、ド・M...氏に、残りの毒や仕掛け爆弾の場所、それらを製造するための材料を手に入れた薬局や薬剤師などを教えた後まもなく息を引き取った。ちょうどその時ド・ヴァルテル夫人が告解から帰宅し、その場で逮捕された。

夫人はすぐに投獄されたが、獄中で首をつって自殺した。

この「ある家庭の犯罪」とヴィルフォール夫人による連続毒殺との共通点は、まず、この犯罪の目的が、自分の息子に財産を集中させるためであることと、毒薬が使用されていることである。さらに、このエピソードにおける次男の亡霊が出たという狂言は、毒薬のせいで病床にあったヴァランティエヌが「[...] 近寄ったり、離れたり、消えたりするこれらの影を見たような気がした [...] j'ai cru voir passer comme des ombres, ces ombres s'approcher, s'éloigner, disparaître」(1049)やモンテ＝クリストが「幽霊 fantôme」(1046)のように見えた「出現」L'Apparition と題された100章の幻想的なエピソードへと転換される。また、「ダイヤモンドと復讐」同様「ある家庭の犯罪」においても、爆発事件の嫌疑が、無実の人（その晩屋敷に戻らなかったド・M...氏の姉の部屋係）に嫌疑がかけられているが、上述のように『モンテ＝クリスト伯』においても、無実のヴァランティエヌに当初は嫌疑がかけられる。

以上の点から、「ある家庭の犯罪」は、ヴィルフォール夫人による連続毒殺のエピソードのモデルとしては「ダイヤモンドと復讐」よりも共通点が多いが、このエピソードから採用しなかった要素もあり、それらに注目すると興味深いことが浮かび上がってくる。

まず一つ目は、殺害の究極的な目的であるが、ド・ヴァルテル夫人のそれが、思いを寄せる同輩公との結婚であるのに対し、ヴィルフォール夫人の目論見は、盲目的な愛から自分の息子にできるだけ多くの財産を残すことである。それゆえ、「ある家庭の犯罪」のド・ヴァルテル夫人は一人で自殺するが、ヴィルフォール夫人は、「良き母は息子なくして旅立ちません！

Une bonne mère ne part pas sans son fils !(1142)」と遺言し、息子も道連れにする。ド・ヴァルテル夫人の罪はヴィルフォール夫人に対応するものの、その奔放さは、ダングラール夫人のほうに移植されたと解釈できるかもしれない¹¹。

二つ目は、「ある家庭の犯罪」におけるサン＝ジャンに相当するド・ヴァルテル夫人の共犯者を『モンテ＝クリスト伯』のこのエピソードでは採用しなかったことで、その代わりに、モンテ＝クリストが、ヴィルフォール夫人に毒物学の知識を授け、間接的に連続殺人の幫助をするように設定したことである。この点は、「ダイヤモンドと復讐」におけるペットの連続殺害と比較してみるとおもしろい。連続毒殺に主人公が関わるという点では、『モンテ＝クリスト伯』は、「ダイヤモンドと復讐」のエピソードの方を採ったように思われるが、このエピソードにおいてはピコのみがペットの殺害を実行するのに対し、『モンテ＝クリスト伯』では、主人公が、自身とは全く異なる目的をもつヴィルフォール夫人を操り、その復讐劇の道具にすることで、モンテ＝クリストにヴィルフォール家の命運をも左右する能力を付与している。

三つ目、そして最も重要と思われるのが、ヴァランティエヌが生き返ることである。「ある家庭の犯罪」では、若さと体力のおかげで死なずに済んだ料理人の助手と死を遅らせる解毒剤は存在するものの、生き返る者はない。しかし、モンテ＝クリストは、ヴァランティエヌに薬を飲ませて仮死状態にし、一か月後に生き返らせている。このヴァランティエヌの蘇生は、『モンテ＝クリスト伯』の再生のテーマと連動していると考えられるため、次章で詳しく検討する。

3. 再生の夢

『モンテ＝クリスト伯』が、復讐とその是非を問う物語であることは、『アレクサンドル・デュマ辞典』を引いてみるまでもなく明白だが¹²、この小説全体を通して読むと、復讐劇以上に、再生のテーマの重要性に気づくだろう。この点に関しては、マクシム・プレヴォーが、神話の観点から

¹¹ ヴィルフォール夫人の毒殺事件のモデルとしては、カスタン事件やデュマの後见人だったジャック・コラルの孫娘で、夫を毒殺して終身刑の判決を受けたラファルジュ夫人の事件も指摘されている。Voir Claude Schopp, « Préface », dans Alexandre Dumas, *op. cit.*, p. LXXIV.

¹² Claude Schopp, « *Le Comte de Monte-Cristo* », dans *Dictionnaire Alexandre Dumas*, CNRS Éditions, 2010, p. 129.

デュマの作品を論じた研究ですでに指摘しているが¹³、われわれが取り上げているヴィルフォール夫人による連続殺人も、モデルとなったエピソードの結末である夫人の自殺の後に、ヴァランティエヌの蘇生を接ぎ木することで、このテーマに対応させているように思われる。

ところで、この蘇生のエピソードの着想源は、後年デュマが著した『私の回想録』 *Mes Mémoires* (1852-1856)の1830年から1833年の思い出の中に見出せる。

[...] je lus, par hasard, un roman d'Auguste Lafontaine – je voudrais bien vous dire lequel, mais je n'en sais plus rien – ; tout ce que je me rappelle, c'est que l'héroïne se nomme Jacobine.

On faisait prendre un narcotique à cette Jacobine, on l'endormit, on la faisait passer pour morte, et, grâce à cette mort supposée, qui la déliait des entraves de la terre, elle pouvait épouser son amant.

Cela ressemble bien un peu à *Roméo et Juliette* ; mais quelle est ici-bas l'idée qui ne ressemble pas peu ou prou à une autre idée¹⁴?

デュマが読んだというこの小説で、ジャコビーヌという登場人物は単に麻酔剤によって死んだと思わせるわけだが、ヴァランティエヌの場合、仮死状態になる薬を服用させ、その後生き返らせるという点で、モンテ＝クリストが何らかの科学知識を实践したことが想定される。また、デュマが注目するように、確かにこの小説は『ロミオとジュリエット』を思わせるが、それはヴァランティエヌのエピソードにも当てはまるだろう。デュマが心酔していたシェークスピアの作であり、かつその有名な劇作の主人公二人の家系が敵対していたように、ヴァランティエヌとマクシミリアンも、彼らの両親が王党派とボナパルト派という敵対関係（ただしヴァランティエヌの父方の祖父ノワルティエは元ジャコバン派、ついでボナパルト派となるために、マクシミリアンと結ばれる余地も残されてはいるのだが）にあるだけに一層既視感は強まる。しかし、シェークスピアの名作の悲劇的な

¹³ Maxime Prévost, *Alexandre Dumas Mythographe et mythologue : L'Aventure extérieure*, Champion, 2018, p. 26-89.

¹⁴ Alexandre Dumas, *Mes mémoires*, tome II, variantes et notes établies par Pierre Josserand, Laffont : Bouquin, 1989, p. 703. 尚、ダニエル・コンペールは、この一節を、ヴァランティエヌのエピソードの起源としている。Cf. Daniel Compère, *op. cit.*, p. 15.

結末とも「ある家庭の犯罪」という直接的なモデルの結末とも異なり、デュマは、この二人のエピソードを、生きて結ばれる方向に展開させ、それをモンテ＝クリストとエデの旅立ちと連動させながら、この長い物語を閉じている。ここにやはり、『モンテ＝クリスト伯』における再生のテーマを強調にする狙いを読みとりたくなるのだが、事実、ヴァランティースの蘇生とダンテスがモンテ＝クリストへと生まれ変わる過程には共通点が多い。まず、エドモン・ダンテスは、ファリア神父と入れ替わって、20章のタイトルにある「イフ城の墓場」Le cimetière du château d'If、つまり海に投げ込まれたことで死亡したことにされる（参照：28章）。一方、ヴァランティースも亡くなったと判断され、ペール＝ラシェーズ墓地に一旦葬られる（参照：105章）。次に、ダンテスは、その「墓地」から生還し、マルタ島の船乗り、ブゾーニ神父、ウィルモア卿、船乗りシンドバッドと次々に身分を変えるが、ローマを舞台とする32章になってからモンテ＝クリスト伯として登場する。また、ヴァランティースは、身分や名前を変えることはないものの、墓地からモンテ＝クリスト島に運ばれ（参照：112章）、そこで生き返る。つまり、この二人の蘇生には、地中海世界が深く関わっているのだが、このことは、デュマのマルセイユに対するイメージと対応関係にある。モンテ＝クリストが、マクシミリアンと共にパリを離れ、目的地であるマルセイユが近づく頃に、次のような一節がある。

Bientôt Marseille, blanche, tiède, vivante ; Marseille, la sœur cadette de Tyr et de Carthage, et qui leur a succédé à l'empire de la Méditerranée ; Marseille, toujours plus jeune à mesure qu'elle vieillit, apparut à leur [Monte-Cristo et Maximilien] yeux. (1150)

これとほぼ同じ内容のことを、デュマはすでに、『フランス南仏地方』*Le Midi de la France*(1841)においても書いているが¹⁵、とりわけこの街が「年齢を重ねるに従って常に若返る toujours plus jeune à mesure qu'elle vieillit」ことには注目しておくべきだろう。「テュロスやカルタゴの妹 la sœur

¹⁵ Cf. Alexandre Dumas, *Le Midi de la France*(1841), Calman-Lévy, nouvelle édition, 1887, p. 133. Voir <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k102111r/f134.item> また、筆者は別の論文で、デュマとマルセイユの関係について考察した。Akiko Miyagawa, « Alexandre Dumas, écrivain marseillais ? — Présence de Dumas dans *Le Sémaphore de Marseille* en 1860 — », 『広島大学フランス文学研究』37, 2018, p.12-22.

cadette de Tyr et de Carthage」として古代からの地中海世界の要所としての地位を受け継ぎながらも、この街は今なお生き生きとしている。『モンテ＝クリスト伯』においても、マルセイユ沖のイフ城を取り巻く海が「イフ城の墓場」でありながらも、ファリア神父の知と富を受け継いだダンテスは、そこから異なる名前と身分で生まれ変わる一方、代々王家に仕えてきた家系の子孫であるヴァランティーヌは、先祖ゆかりの地であるマルセイユが古来その要所となっていた地中海世界で息を吹き返す。ダンテス同様、ヴァランティーヌの蘇生も、古いものを受け継ぐことによって新しいものが生まれるという、デュマが抱いたこの街のイメージと合致する。

また、ヴァランティーヌのエピソードは、古くから伝わる奇跡譚や知識が援用される文脈の中でも展開する。ヴァランティーヌが生き返ることを示唆するモンテ＝クリストに、マクシミリアン・モレルは次のように返す。

« Mon ami, mon père ! s'écria Morrel exalté, prenez garde, vous redirai-je pour la troisième fois, car l'ascendant que vous prenez sur moi m'épouvante ; prenez garde au sens de vos paroles, car voilà mes yeux qui se raniment, voilà mon cœur qui se rallume et qui renaît ; prenez garde, car vous me feriez croire à des choses surnaturelles.

« J'obéirai si vous me commandiez de lever la pierre du sépulcre qui recouvre la fille de Jaïre, je marcherais sur les flots, comme l'apôtre, si vous me faisiez de la main signe de marcher sur les flots ; prenez garde, j'obéirais.

- Espère, mon ami, répéta le comte. [de Monte-Cristo] (1091)

この引用以前にすでに2回もマクシミリアンが「お気をつけ下さい」と言ったにもかかわらず、性懲りもなくこの言葉はここでも2度繰り返され、さらに「活気づく目」、「再び火がとまり、生き返る心」といった、同じ関係代名詞を使って名詞を修飾する表現が繰り返されるところなどは、フロベールを「機械的だ！」*La mécanique !*と叫ばせ、エコの神経を逆なでしたのであろう文体ではあるが、それはさておき、イエスの力で生き返るヤイロの娘の新約聖書の一節¹⁶は興味深い。聖書のエピソードで、イエスがヤイロの娘を蘇らせたように、モンテ＝クリストはヴァランティーヌを蘇生させるが、この聖書への参照により、モンテ＝クリストのその名に含まれる

¹⁶ 参照：マタイ 9:18-26；マルコ 5:21-43；ルカ 8:40-56。このマクシミリアンの言葉に対応する節は、マタイ 14:24-29；17:20。

神のような能力が、一層明確に印象付けられる。

そして、このモンテ＝クリストの能力は、合理的に説明されない。確かに、モンテ＝クリストは、獄中でファリア神父からさまざまな学問知識を授かっており、ヴァランティエヌの仮死以前のサン＝メラン夫人とパロワの死因も、52章の「毒物学」*Toxicologie*でのヴィルフォール夫人とモンテ＝クリストとの会話からブルシンの服毒という説明がつき、それは74章の「約束」でダヴリニー医師がヴィルフォールにする説明によっても裏付けられる。さらに、毒殺を警戒したノワルティエが、麻痺の治療として服用しているこの薬品の半分の量を、孫娘のヴァランティエヌに毎回飲ませて、自分同様この毒に慣れさせていたことも、ヴィルフォール夫人から毒に慣れる以外の解毒方法を聞かれ、モンテ＝クリスト自身、ないと答えた（参照：568）ことにも対応している。しかし、科学的な説明はこの程度にとどまり、仮死状態のヴァランティエヌを一カ月後に生き返らせた方法は謎のままだ。ところで、この人物の科学知識の豊富さと治療の実績に驚嘆し、医者だったのかと尋ねたヴィルフォール夫人に対し、モンテ＝クリストは、科学と博物学をかなり根本的に学んだとは答えながらも、治療については、以下のように答える。

- Molière ou Beaumarchais vous répondraient, madame, que c'est justement parce qu je ne l'étais pas que j'ai, non point guéri mes malades, mais que mes malades ont guéri. (565)

モンテ＝クリストは、自分が医師でないからこそ、病人は治癒したとしている。つまり、ヴァランティエヌの蘇生も、科学知識の次元とは異なる何らかの能力によってなされたことが推測されるのだが、この時、モンテ＝クリストという人物像は、その2年後にデュマが発表することになる、『ジョゼフ・バルサモ』*Joseph Balsamo* (1846-1848)のタイトルと同名の主人公が錬金術の知識を援用して起こす数々の奇跡を先取りしている。また、窮した人々のもとにどこからともなくやってきて救う姿は、『モンテ＝クリスト伯』に先行するウジェーヌ・シュエの『パリの秘密』*Les Mystères de Paris* (1844)のロドルフのそれとも重なる。これら大衆小説の人物の中に、

グラムシやエコは、のちにニーチェが説く超人論の起源を見ているが¹⁷、拙稿の目的はモンテ＝クリスト像から思想を抽出することではないため、この問題はここでは掘り下げないでおく。ただ、この人物に神のような能力を付与しようとした形跡は、モンテ＝クリストの「[...] 人間は、神のように創造したり破壊したりできるようになったときにはじめて完璧になるでしょう。人間は、すでに破壊することができるのですから、半分は成されたということでしょう [...] l'homme ne sera parfait que lorsqu'il saura créer et détruire comme Dieu ; il sait déjà détruire, c'est la moitié du chemin de fait.」(571)という言葉や、マキシミアンが朦朧とし始めた意識の中で見たような気がしたモンテ＝クリストとヴァランティエヌの次の姿にも認められるだろう。

Alors il lui [Maximilien] sembla que Monte-Cristo souriait, non plus de sourire étrange et effrayant qui plusieurs fois lui avait laissé entrevoir les mystères de cette âme profonde, mais avec la bienveillante compassion que les pères ont pour leurs petits enfants qui déraisonnent.

En même temps le comte grandissait à ses yeux ; sa taille, presque doublée, se dessinait sur les tentures rouges, il avait rejeté en arrière ses cheveux noirs, et il apparaissait debout et fier comme un de ces anges dont on menace les méchants au jour du jugement dernier. [...]

Aussitôt, une immense clarté rayonnant dans une chambre voisine, ou plutôt dans un palais merveilleux, inonda la salle où Morrel se laissait aller à sa douce agonie.

Alors il vit venir au seuil de cette salle, et sur la limite des deux chambres, une femme d'une merveilleuse beauté.

Pâle et doucement souriante, elle semblait l'ange de miséricorde conjurant l'ange de vengeances. (1199-1200)

ここでの二項対立的で戯画的な描写の美学的な問題も問わないでおこう。

¹⁷ Voir Eco, Umberto, *op. cit.*, p. 7. エコは、この著作がグラムシから着想を得たものとしている。また、グラムシ・エコの見解に対し、ヴィットリオ・フリジェリオは、モンテ＝クリスト像から読み取れる思想に呼応するのは、むしろマックス・シュティルナー『唯一者とその所有』*Der Einzige und sein Eigentum*(1844)であると論じている。Cf. Vittorio Frigerio, « Le Comte de Monte-Cristo : surhomme bourgeois ou Unique », in La Société des amis d'Alexandre Dumas (éd.), *Les Trois mousquetaires, Le Comte de Monte-Cristo : 150 ans après, Acte du colloque*, organisé par Fernand Bassin et Claude Schopp, Marly-le-Roi, 1995, p. 119-133.

肝要なのは、この二人が、それまで以上の優雅さと慈悲をたたえた存在として現れたことだ。ここにおいてモンテ＝クリストは、復讐によって社会の担い手たちを破滅へと追い込む悪魔的な存在ではなく、創造することのできる完璧な人間に近くなり、ヴァランティーンは、「復讐の天使を払いのけた慈悲の天使」のように現れる。ヴァランティーンは、以前よりも輝かしい存在となるが、すでにファリア神父の授けた富と知識によってモンテ＝クリスト伯となっていたエドモン・ダンテスは、ヴァランティーンを蘇生させながら、天使のような存在になっている。

おわりに

『モンテ＝クリスト伯』における再生は、死以前の生を単に取り戻すことではなく、それ以上の存在、さらには神がかった能力を持つ存在へと生まれ変わることである。おそらく、長年にわたって数多くの読者がこの小説に魅かれてきた理由は、この夢—現在よりはるかに優れた存在へと生まれ変わる夢—を見せてくれることによるだろう。この再生のテーマは、ダンテスからモンテ＝クリストへの変貌に最も顕著に表わされているのだが、この小説においては、主人公が変貌するだけではない。彼の敵たち、モルセール、ダングラール、ヴィルフォールもまた、モンテ＝クリストとしてダンテスが彼らに会う頃には、フランスの重要な権力を握るほどにまで変わっていた。また、ダンテス投獄後、経営危機に陥ったモレル商会も、モンテ＝クリストとなったダンテスの力で奇跡的に持ち直す。モルセールの裏切りによって父を殺され、奴隷としてその身を売られる憂き目を見たエデモ、モンテ＝クリストに買われ、父親の無念を晴らし、モンテ＝クリストとともに旅立つ。そして拙稿で取り上げた連続毒殺のエピソードは、首謀者の死で終わるのにもかかわらず、小説では、犠牲者を蘇らせることで再生のテーマに対応させていた。このように、『モンテ＝クリスト伯』には、再生のテーマはいたるところに見出せるのだが、まさにこのような、どのエピソードを読んでも同じテーマが現れ、その数で圧倒しようとするような方法は、フロベールでなくとも難じたくなるかもしれない。ただ、こういった一義性を追求するのはデュマに限ったことではなく、例えばゾラにもその傾向はみられ、その特徴や利点はすでに評価されてきた¹⁸。そ

¹⁸ 例えば以下の研究があげられる。Philippe Hamon, « Zola romancier de la transparence », in *Europe*, 1968, p. 385-391, Lucien Dallenbach, « L'Œuvre dans l'œuvre chez Zola », in Pierre Cogny (publié par),

れゆえ、解釈の余地もないほど明快な物語を読む際に重要になるのは、それを理由に評価しないことではなく、一義性や透明性の性質やそれらを創出する方法の解明になるだろう。その時には、今回は保留した文体の問題も考慮に入れなければならないことが予想されるが、こういった紋切り型や反復がもたらす効果や、これらの手法で固められた物語からでも、多面性や思わぬ解釈が導き出されることは、近年大衆小説研究において注目されているテキスト加工やテキスト以外のメディアへの移行性の観点からの研究を見る時、すでに明らかであり、『モンテ＝クリスト伯』についても、これらの観点から論じた研究が発表され始めている¹⁹。さまざまな版のみならず、今日まで世界中で発表され続けている、映画、テレビドラマ、漫画などの翻案作品とも照合させることによって、『モンテ＝クリスト伯』のあらたな解釈を引き出すことは、まだ始まったばかりである。

Le Naturalisme : communications, interventions, Centre culturel international de Cerisy-la-Salle, Union générale d'éditions : 10/18, 1978, p. 125-147.

¹⁹ 安川孝は、日本フランス語フランス文学会2016年春季大会ワークショップ2「大衆小説研究の現在」において、これらの観点とその有効性について論じた。この論考は、宮川朗子、安川孝、市川裕史『大衆小説研究の現在』（広島大学出版会、近日刊行）に収録されている。また、これらの観点から論じられた代表的な研究は以下の通りである。Jacques Migozzi (éd.), *De l'écrit à l'écran. Littératures populaires : mutations génériques, mutations médiatiques*, Limoges, PULIM, 2000 ; Daniel Compère (dir.), « Les réducteurs de texte », in *Le Rocambole. Bulletin des amis du roman populaire*, n° 38, 2007 ; Paul Bleton, « Les fortunes médiatiques du roman populaire », in Loïc Artiaga (éd.), *Le Roman populaire : des premiers feuilletons aux adaptations télévisuelles, 1836-1960*, Paris, Éditions Autrement, 2008, p. 137-156 ; Matthieu Letourneux, *Fictions à la chaîne : Littératures sérielles et culture médiatique*, Seuil : Poétique, 2017。これらの観点から論じた『モンテ＝クリスト伯』には次の論文がある。Fernande Bassan, « Les adaptations théâtrales du *Comte de Monte-Cristo* », in La Société des amis d'Alexandre Dumas (éd.), *op. cit.*, p. 95-101 ; Sylvie Milliard, « Monte-Cristo à l'écran », in Jacques Migozzi (éd.), *op. cit.*, p. 633-645。